



愛知淑徳大学
初年次教育部門
〈全学日本語教育〉
広報誌

あっと @JL

全学日本語教育通信

第10号 (最終号)
2016年3月31日発行

あっと @JLとは？

初年次教育部門〈全学日本語教育〉は、学生の日本語運用能力 (Japanese Literacy) 向上をサポートする組織です。ここから、学内における日本語運用能力向上にむけたさまざまな取り組みを広く発信したいという気持ちを、“@”に込めました。

終刊のごあいさつ

より開かれた議論の場へ

「既読がつかない」という耳慣れない日本語が飛び交うようになったのは、つい最近のことのような気がします。「既読がついているから、伝わっているはず」という言葉も日常的によく耳にします。この、急速に普及したソーシャルメディアのおかげで「既読=伝わった」という認識の図式が広まったことは、言語を介したコミュニケーションにおける、ここ数年の最も大きな変化の一つでしょう。ただし、「いいね!」についても言えることですが、「既読」が「伝わった」ことを、「いいね!」が「認められた」ことを示すような伝達は、あくまで指向性を共有するコミュニティの中でのみ成り立つのだということに留意しましょう。現実の世界は容易に〇×がつけられるほど単純ではありません。小論文やディベートの授業で、相異なる立場の考えを比較対照しながら有効な妥協点を探り当てたり、建設的な別見解を導き出すことを学ぶのは、私たちの生きるポスト近代と呼ばれる時代が多様な価値観・立場の交錯する世界だからです。「わかりあえない」ものを「わかりあえる」ものにするのが、あるべき市民社会の姿だという考えがあるからです。

私たち初年次教育部門〈全学日本語教育〉では、日本語運用能力の向上に向けた全学的な取り組みを学内外に発信することを目的として、2011年3月に『@JL 全学日本語教育通信』第1号を発行して、それ以降、原則として年2回、同誌を発行してきました。今号が節目の第10号です。これまで、全9科目ある開設科目「日本語表現」の授業内容と学生の取り組みを各号1科目ずつ紹介したり、本学オリジナルのテキストやライティングサポートデスクの試みをお知らせしたりしてきました。

この間、本誌のコンセプトは一貫して、「私たちのことを知ってください」「私たちはこんなことをしています」というメッセージを発することだったと言ってよいでしょう。率直に言えば、発足したばかりで歩みもままならない私たちは、他者からの承認を求めているのです。最初の話題に絡めて言えば、「既読」の輪を広げなかった、「いいね!」のレスポンスが欲しかったわけです。

ありがたいことに、この5年間で、本学の〈全学日本語教育〉の取り組みに対しては学内外から多くの関心を寄せさせていただき、時折、遠くからわざわざ見学に来てくださる方もいらっしゃるようになりました。私たちと同じような問題意識と困難を抱える諸機関と、本誌を通じてつながりを

初年次教育部門長 兼 全学日本語教育主任
メディアプロデュース学部教授

永井 聖剛



持つことができたことは非常に有意義なことであり、大きな励みにもなりました。

そんな「広報誌」としての『@JL』の役割は、この10号まででほぼ果たせたのではないかと、私たちは考えています。いま私たちは「既読」や「いいね!」の反応を以て能事足りとする発信とは異なる、別のメッセージを発信するべく準備を進めています。

少し具体的に話しましょう。『@JL』では、本学オリジナルテキストや「日本語表現」科目のカリキュラムを紹介してきましたが、これらはいずれも、その時点において十分に練られたものです（だから「いいね!」と言ってもらえると嬉しい）。ただしこれらが、授業という相互交通の場でどのような教育効果や理解上の困難を招くかについては紹介記事からは見えてきません。問題を克服するための試行錯誤や改訂に至るプロセスも筋道立てて示すことはできません。また、これ自体では完結しているように思われる「日本語表現」科目のカリキュラムも、大学全体の教育課程の中でどれくらい有機的に機能しているのかはまた全く別問題です。入学試験との関係においても同じことが言えるでしょう。おそらく他の大学でも、入学前教育と初年次教育、専門教育との「接続」には苦勞していることと想像しますが、初年次教育としてのライティング指導は、入学試験や専門教育との関係の中でこそ、その内実が問われるものであり、ひとつだけ取り出して評価できるものではないと思います。

2016年度に新たに刊行する予定の『年報』(年1回発行)では、私たちの授業の実践報告や教材についての提言、入学試験や他の教育課程との連携に関する問題提起など、より実証的な研究報告を心掛けます。これが、学内外を跨いだ議論や意見交換の端緒となり、ひいては、教室で行われるライティング指導の活性化につながることを目指します。『@JL』を読んでくださったみなさまには、今後も引き続き、本学の〈全学日本語教育〉へのご理解とご支援をお願いいたします。

@JL既刊号を振り返って

創刊号から5年。年2回の発行を続けてきた広報誌「@JL」は、本号で終刊を迎えます。部門の歩みとともに「@JL」の既刊号(*)を振り返ります。

2010年度

- 「全学日本語教育部門」発足
- 全学共通履修科目「日本語表現」(全学必修の基幹科目を含む全9科目)開講

特集

愛知淑徳大学全学共通履修科目「日本語表現」教育課程の概要

2010年度に新設された全学共通履修科目「日本語表現」の開講目的、全体像および特色を紹介しました。



創刊号(2011年3月発行)

特集

4年間をふりかえって 一所属教員から

「全学日本語教育部門」が開設4周年を迎えるにあたり、所属教員が4年間を総括しました。

「日本語表現」履修生1万5千人突破

2014年度

- 「全学日本語教育部門」から「初年次教育育部門〈全学日本語教育〉」に名称変更
- 愛知淑徳大学研究助成採択事業「対話」を重視する「ライティング支援」の実践的研究」スタート(2カ年計画)
- 「ライティングサポートデスク(通称WSD)」発足



第6号(2014年3月発行)



第5号(2013年9月発行)



第7号(2014年9月発行)

特集

ライティングサポートデスク(WSD)紹介

全学生を対象とした学習支援施設「WSD」の設置趣旨、利用方法などを紹介しました。

特集

対話を重視するライティング支援

WSD利用者とチューターを招いた座談会でWSDの利用経験や利用方法について語ってもらいました。



第8号(2015年3月発行)

「日本語表現」履修生2万人突破

2011年度

- 「日本語表現」受講アンケートの実施
(以降年2回実施)

特集 協同学修による小論文作成

1年生対象の全学共通必修科目「日本語表現T1」履修生を招いた座談会で授業を通して学んだことを語ってもらいました。



第2号(2012年3月発行)

2012年度

- 「授業実践報告会」の開催
(以降年1回開催)

特集 キャンパスライフと日本語運用力

受講アンケートの結果からは、学生たちが日本語表現科目で修得したことを学内外で実践しようとしていることがわかりました。



第3号(2012年9月発行)

2013年度

- 『ことばをつなぐ、学びにつなぐ
(活動報告書2010-2013)』発行
- 「日本語検定」において本学が
「東京書籍賞 最優秀賞」受賞

特集 検定で学修の成果を測る

「日本漢字能力検定」と「日本語検定」の合格者に話を聞きました。

「日本語表現」履修生1万人突破



第4号(2013年3月発行)

特集 TPOに応じたライティングスキルの育成

3コース7科目を開講している「日本語表現」発展科目をご紹介します。

2015年度

- 初年次教育部門
〈全学日本語教育〉
ホームページ開設

特集 テキスト改訂から見る学生の日本語運用スキル

全学必修科目「日本語表現T1」オリジナルテキスト改訂の足跡をたどりながら、本学学生の抱えている日本語運用スキルの課題に迫りました。



第9号(2015年9月発行)

「日本語表現」履修生2万5千人突破



終刊号(2016年3月発行)

今後も様々な機会を通じて
情報発信を続けていきます。

ご愛読
ありがとうございました。

※「@JL」既刊号は初年次教育部門公式HP上でご覧いただけます。

書く書くしかじか...

学生から、教職員から

「読む」という行為の効用

文学部長 兼 教職・司書・
学芸員教育センター長
(前・初年次教育部門長)
小倉 斉



入試方法の多様化など、入学者選抜をめぐる環境の変化により、この10年ほどの間に大学生の学習意欲の低下、目的意識の稀薄化、基礎学力の不足が顕著になってきている。そんな状況への対応として愛知淑徳大学では、自己認識から自己実現へのアクションプランを立案・作成し、10年先、20年先の生き方を見つめ、考えさせるために、初年次教育にさまざまな方策を講じてきた。その柱ともいべきものが「日本語表現T1・T2」の開講だ。学生の日本語基礎力の欠如を嘆いているだけでは問題は解決しない。初年次教育部門の日本語教育担当教員は、コミュニケーションツールとしての「本物の日本語力」を身につけさせることに重点を置いてきた。目標としたのは、社会に参画する力、よりよい人間関係を構築する力だ。この力は、社会を生き抜く力につながると確信している。コミュニケーションツールとしての日本語を正しく使いこなすことが、表現力や思考力を高めるトレーニングにもなる。

ところで、より正確な言葉で「考え」、「理解し」、「表現する(伝える)」力を育成するために、何が必要なのか。それは、「読む」力である。「読む」行為を通してわれわれ

は「世界」を構築し、世界の秘密や人生の謎について認識する。さらに、構築した「世界」と時代や社会・文化状況との間に脈絡をつけ、言語表現の背後に潜む時代や社会状況を読み解いていく。「読む」力を身につけることで、言語表現が必然的に文化的・社会的・政治的メッセージを持ち、読者に何らかの立場をとるよう誘惑するからくりの解明が可能となる。われわれは、「読む」行為・体験の蓄積を通して言語表現を「読む」ための多くのサンプルを得、自力で「読み」、「考える」トレーニングを重ねる。やがてそれは、メディア、社会、文化、人間存在の秘密を「読む」ことへとつながり、世の中の事象や人間存在を批判的に見る力を養う。

酒井邦嘉は「紙の本」を「読む」という行為の効用について述べている(『脳を作る読書—なぜ「紙の本」が人にとって必要なのか—』実業之日本社、2011年11月)。「読む」ということは、単に視覚的にそれを脳に入力するというのではなく、足りない情報を想像力で補い、曖昧なところを解決しながら「自分の言葉」に置き換えていくプロセスであり、「読む力は読書でしか鍛えることはできない」。「若い読者は、多様なスタイルの文章に触れたほうがよい」。「我流の偏った読書だけでは、基礎的な読む力の向上は」望むべくもなく、「高等教育を受ける学生は、それまで関心のなかった分野を含めたさまざまなテーマの文章に触れること」で、幅広い「教養」と「書く」力を身につけることができるはずである。

インフォメーション

☆日本語検定学内団体無料受検 (11月7日実施)結果

- ・受検者554名(2級・3級合計)
- ・2級認定者(準認定含む)131名、同認定率25.7%

☆平成27年度後期「愛知淑徳大学図書館〈書評〉大賞」受賞者決定

(主催:図書館、協力:初年次教育部門)

応募総数142件、このうち6名が入賞しました。

☆学生の投稿文が『中日新聞』に掲載されました

中野花菜(文学部国文学科1年)「漢文解釈—一生の趣味に」
『中日新聞』2016年1月5日「ヤングアイズ」掲載

☆大学コンソーシアム京都主催FDフォーラム に登壇しました

第21回FDフォーラム「大学教育を再考する～イマドキから見えるカタチ～」(3月6日、京都外国語大学)

◎第10分科会「大学におけるライティングセンターの役割」
登壇者:初年次教育部門准教授 外山敦子

☆平成27年度「初年次教育部門教育実践・研究発表会」(通算第4回)開催(2月22日)

当日は本学教職員を中心に多数の参加があり、学生の日本語運用能力向上のための取り組みや課題を共有することができました。

【第1部】研究助成(特別教育研究)採択事業報告会

◎「対話」を重視する全学的ライティング支援の試み—「ライティングサポートデスク」における学修支援の成果と課題—
(初年次教育部門准教授 外山敦子)

【第2部】教育実践・研究発表会

◎初年次学生の文章に見られる情報認識のありかたと「カテゴリー」意識の欠落 (初年次教育部門講師 荒木弘子)

◎スマートフォンを使用した授業実践の報告—自己の客観視から発表態度を省みる試み— (初年次教育部門講師 石田莉奈)

☆龍谷大学が本部門を視察されました

ライティングサポートデスクの取り組みを説明しました(12月9日)。

編集後記

お伝えして参りましたように『@JL』は本号をもって終刊とさせていただきます。紙面にご登場いただいた方々、読者の皆様には心より感謝申し上げます。『@JL』は終刊いたしますが、本部門は引き続き新たな刊行物および右記HPを通して情報発信を続けて参ります。今後ともご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。(荒木弘子)

発行年月日 2016年3月31日

公式ホームページ

編集/発行 愛知淑徳大学初年次教育部門(全学日本語教育)
〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目9
TEL: 0561-62-4111 (代表)
E-mail: nihongo@asu.aasa.ac.jp
HP: http://www.aasa.ac.jp/shonenji/nihongo/

